

【研究会】

トルファン漢語文書と大蔵経

西 脇 常 記

ただいま、ご紹介に与かりました西脇です。私の専門は古代中国思想・文化史であります。曹洞宗専門学支校として開校された愛知学院大学の禅研究所で宗教に関する講義をおこなうことは僭越な話であります。従って、この講義の機会を与えて下さった佐藤悦成教授には、このような演題でもいいかとお聞きして引き受けさせていただきました。

中国思想史を専門としている関係から、昔、中国の禅僧の語録を少し読んだことがあります。唐の黄檗希運の法嗣に睦州道明がいます。彼は「如何是一代時教」の問いに対して「上大人、丘乙己」と答えています。

睦州の答えは唐から宋にかけての児童の漢字識字教科書

トルファン漢語文書と大蔵経（西脇）

から取った言葉です。識字教科書としては、『千字文』が有名ですが、どれも儒教の経典を読むための準備を担います。易しい漢字、つまり筆画の少ない字から配置されているのは、今も昔もかわりありません。

この問答は、唐の禅僧も、中国の知識人である儒教徒と同じように、漢字文化の世界に生きていたことを示しています。つまり、漢字で自己の考え、悟りの世界を表現し、伝えようとしたのです。禅ばかりでなく、仏教そのものが、中国では、漢字に翻訳されて理解されてきました。

そして言葉は、思想を伝える手段というより、思想そのものであります。漢訳仏教世界も中国思想世界も共に漢字を使っています。つまり、共通の思想基盤の上にあるとい

うことです。今日は、そのことを前提に、漢訳仏典のテキストである大藏經について話させていたただきたいと思います。

一 トルファン文書の価値

いま、お配りしました史料は、高楠順次郎・渡辺海旭『大正新修大藏經』（大正十三年から昭和九年）の最後の部分に載せる「略符」です。ご承知のように、『大正新修大藏經』の底本は、芝の増上寺の高麗海印寺版の大藏經です。それとの対校に用いられた各種のテキストとその略号の一覧表が「略符」です。『大正新修大藏經』の各頁の下部にはこの「略符」を用いてテキストの異同を記載しています。

高麗海印寺版の大藏經テキストは、高麗再雕本とも呼ばれます。後で詳しくふれたいと思いますが、十三世紀の木版印刷本（一二五一年完成）です。漢訳仏典も他の漢字文献と同じように、木簡や帛に書かれ石にも刻まれましたが、ほとんどは紙に書かれたり、印刷されたものです。この「略符」に載せられたテキストも写本か版本です。「正

倉院聖語藏本」を初め、各寺院のテキストはほとんどが写本です。

その他に、写本のテキストとして載せられているものの中で、本日の演題と関わりのあるのが「敦煌本」、つまり敦煌写本です。二十世紀の初めに、列強から派遣されたスタイン、ペリオ、大谷探検隊等は、敦煌・莫高窟の第十七窟（藏経洞）から大量の古写経を持ち帰りました。『大正新修大藏經』には、こうした探検隊の本国に収まった古写経を求めて長い船旅をし、ロンドンやパリで写しとった先人達の成果も採り入れられています。

特に『大正新修大藏經』第八十五巻の古逸部・疑似部は、敦煌写本に負っています。古逸部は『大正新修大藏經』編纂時には伝わらなかったもの、例えば、№2837 浄覚撰「楞伽師資記」（初期禅宗史書）であり、これによって南宗禅成立以前の唐代禅の研究が進みました。また、疑似部は偽経のことで、正式な經典ではありません。中国あるいはその周辺の地域で、その地の人々のニーズに合わせて作られたものです。従ってそのニーズが一段落すると消えていつて残りません。例えば、№2816「勸善経」

やNo. 2717「新菩薩經」がそれに当たります。

ところで、敦煌写本はあるのですが、トルファン写本はこの「略符」には出てきません。その原因は二つあると思われる。一つは、『大正新修大藏經』が編集され出版された一九三〇年代の前半には、「トルファン文書」「トルファン本」といった呼称はまだなかったからです。トルファン文書は、敦煌のものと同じように、二十世紀のはじめにはロシアやドイツ、大谷の探検によって発見されていたのですが、敦煌の名の下に一括されていました。トルファンの名が表にでるのは、中華人民共和国成立後、一九五九年から一九七五年にかけて、トルファン盆地のカラホージョ（高昌故城）やアスターナで、中国人の手による大規模な発掘が行われ、その成果が世に問われた後のことでもあります。二つ目の理由は、敦煌文書は第十七窟（藏經洞）に保存されていたものであり、首尾の整った大きなものが多いのに比べれば、トルファン文書は廃墟や土中から収集された小さな断片であることによります。丸々一巻残っているようなものはほとんどなく、たいしては十行前後で、校勘テキストとして用いるには小さすぎるために、学

トルファン漢語文書と大藏經（西脇）

者達の注目を集めなかったのです。

最近、創価大学国際仏教学高等教育所から辛嶋静志さんの『道行般若校注』参照 (*A Critical Edition of Lokaksema's Translation of the Aśṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, 2011) が出版されました。初期の漢訳仏典研究を続けておられる辛嶋さんの労作ですが、その校正テキストの一つにトルファン文書（出口「109」、図1）が

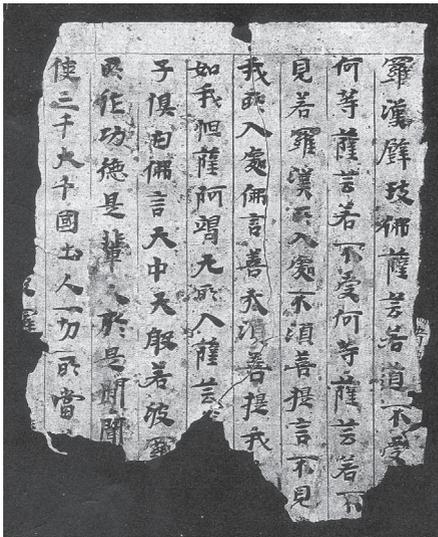


図1 『道行般若經』（出口コレクション）

トルファン漢語文書と大蔵経（西脇）

使われています。その大きさは16・9×13・9cmで僅か九行、しかも九行の下部は破棄されている小断片です。それでも校正テキストに選ばれているのは、この写本が非常に古く、四百年前後のものであると考えられているからです。敦煌本に比べトルファン文書はより古い時代の写本を含むのです。

二 トルファン文書の現在

中国史家の藤枝晃氏は敦煌文書研究の基礎を確立しましたが、紀年のない大半の文書の時代を確定するために、古い時代の写本を多く含むトルファン文書に取り組む必要がありました。彼はその著の『トルファン出土仏典の研究―高昌残影釈録』（法蔵館、二〇〇五）序章「トルファン出土写本総説」で、世界に保存されている文書を以下のよう

- 1 大谷コレクション
- 2 ベルリンコレクション
- 2 a 西独コレクション
- 2 b 出口コレクション

2 c イスタンブル大学コレクション

3 マンネルヘイムコレクション

4 スタインコレクション（第三次収集）

5 サンクトペテルブルグコレクション

6 中国の二つのコレクション（黄文弼発掘と新中国発掘）

7 王樹枏旧藏品↓中村不折・上野淳一等に移行

8 旅順博物館蔵の大谷コレクション

この記述は一九九〇年の東西ドイツ再統一以前のものですから、「2、2 a」とあるのは、ドイツ探検隊が将来したトルファン文書が戦後、東ベルリンと西ベルリンに分かれて保管されていた状況を伝えています。今は、保管場所は分かれています。管理機構は一つになっています。

また中国からは、「6 中国の二つのコレクション」以外にも、最近になって新しく収集されたトルファン文書があつて、図録や研究論文集が出版されています（例えば、『吐魯番柏孜克石窟出土漢文佛教典籍』文物出版社、二〇〇七や榮新江・李肖・孟憲實主編『新獲吐魯番出土文獻』中華書局、二〇〇八）。さらに、上に記された1と8以外

に大谷探検隊の一人であった橋瑞超所有の文書（西蔵寺蔵橋瑞超コレクシヨン）も発表されています。

以上のトルファン文書の中で、藤枝氏が手がけたコレクシヨンは、「2 ベルリンコレクシヨン」でした。その契機は上で述べたように敦煌文書を正しく読むことにありましたが、直接的には、「2 b 出口コレクシヨン」の整理を、このコレクシヨンの所有者である、四天王寺管長の出口常順に依頼されていたからです。出口コレクシヨンは一三〇断片から成りますが、これは出口が一九三四年にベルリン留学から日本に帰国する際に譲り受けたとされているものです。つまり、二十世紀の初めにドイツ探検隊が四度にわたりトルファンを中心に発掘と収集を行った「2 ベルリンコレクシヨン」〔2 a 西独コレクシヨン〕のかたわれです。

東西ドイツ分裂時代の一九六〇年代後半に藤枝氏の手がけた日独協力によるベルリンの漢語仏典断片目録作りは、現在も龍谷大学西域文化研究会によって引き継がれ、これまでにドイツから三冊の目録が出版され、全六千枚の半分以上が目録化されています。

トルファン漢語文書と大蔵経（西脇）

トルファン地域に限定した探検隊はドイツだけですが、「3 マンネルヘイムコレクシヨン」もトルファンのもものが中心であり、これも小断片がほとんどで、その数は二千枚に上ります。フィンランド人のマンネルヘイム（一八六七—一九五二）は発掘したわけではなく、トルファン各地で収集したのです。彼の旅行記には通ったルートが記録されており、はつきり書き留めてはいませんが、その途上、バザール等で買い入れたものであらうと研究者たちは考えられています。

このコレクシヨンがトルファンのものであることは文書からも裏付けられます。例えば、多くの『仁王護国般若波羅蜜多経』（以下『仁王経』と简称）の写本断片がありますが、その中に識語の部分の断片が二枚含まれています。この識語から、これらが高昌国の王による『仁王経』写本であることが分かります。しかし識語はどちらも完全な形では残っていないので、この二枚からは王の名が分りませんでした。

ところで、大谷探検隊のトルファン将来文書の一つにも、やはり識語を伴った『仁王経』がありました（図2）。

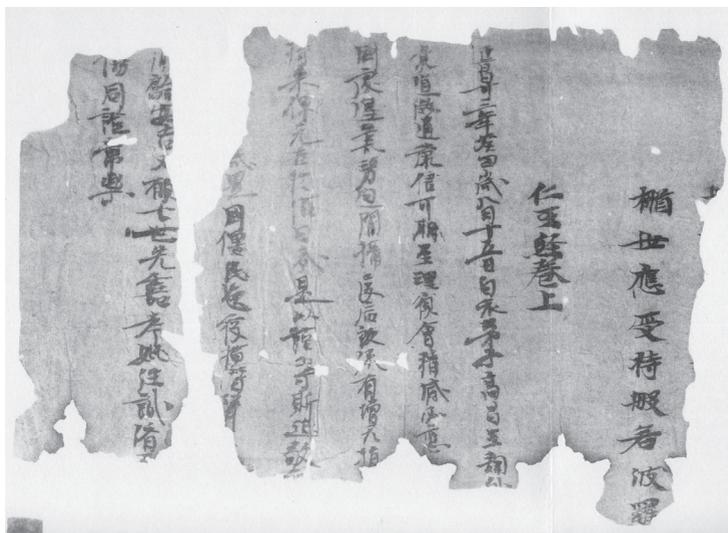


図2 『仁王經識語』（大谷探検隊将来）

いま行方不明になり所在は確認できませんが、香川黙識編『西域考古図譜』下、「仏典附録」一一二（国華社、一九一五）に写真が収められています。これは『仁王經』巻上の末尾に、高昌王麴□□によって書かれた延昌三三年（五九三）の七行の識語がついております。但し、写本の下部は失われているために、高昌王の名はやはり確定できませんでした（『西域考古図譜』の編者は麴□□を麴伯雅と読んでいました）。

また、東洋史家の大谷勝真（一八八五—一九四二）は、京城帝国大学（ソウル大学の前身）に在職中の一九二七年から、在外研究員としてフランスおよびイギリスに二年間留学しました。その間にベルリンにも足を延ばし、ドイツ学術調査隊将来のトルファン文書の調査にもあたりました。そして、ベルリンで大谷文書と同じように識語を伴った『仁王經』写本の存在を発見したのです。

ベルリンの写本は『仁王經』巻上の首部を欠いていたのですが、識語は完全で、そこから、高昌王麴□□は麴乾固であることが明らかになりました（大谷勝真「高昌麴氏王統考」二四頁、『京城帝国大学創立十周年記念論文集』、一

九三六、所収)。因みに大谷がベルリンで見た写本は、現在 Ch271 (T II 2067) の記号を帯びてベルリンに存在するのですが、大きさは $11 \cdot 8 \times 11 \cdot 5$ cm と幾分小さくなっています (図3)。

麴乾固は一五〇部の『仁王経』を写経したと識語には書

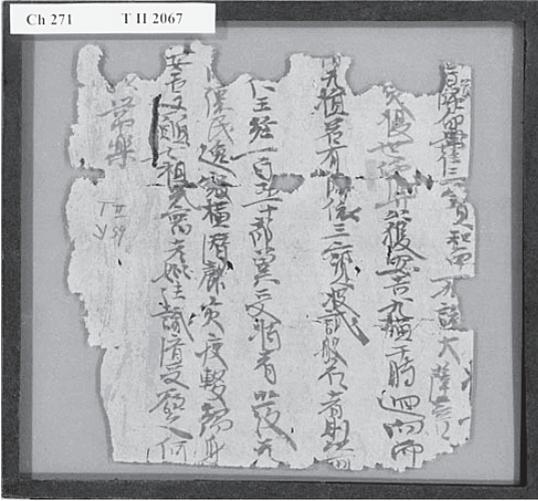


図3 「仁王経識語」(ベルリン蔵)

トルファン漢語文書と大蔵経(西脇)

かれています。マンネルヘイム・コレクションの二断片は、大谷コレクションと同じように、写本下部を欠いていますが、大きさ等を記すと以下ようになります。

No. 22 四五行 一行一六一八字 9・1×89・3 cm 『仁

王経』巻下 (T8833b21-834a8) + 識語(延昌三



図4 「仁王経識語」(マンネンヘイム・コレクション)

一年「五九一」（図4）

No. 63 11・2×16・9 cm 『仁王經』卷下（T8.83448）十識

語（延昌三二年「五九一」）（図5）

写された時代、識語の文章そのものは変わらないのですが、No. 22は識語を五行で収めているのに対して、No. 63は七行となっています。大谷やベルリンのものはNo. 63と同じく七行です。一五〇部はおそらく一度に筆写されたのではなく、日をずらしたものと想像、No. 22は延昌三十一年二月十五日の、No. 63は同じ年十二月十五日の日付です。ベルリンはNo. 63と同じであり、大谷は延昌三十三年八月十五日と幾分遅れます。また識語の置かれる場所ですが、巻上末と巻下末の両方の例が見られ

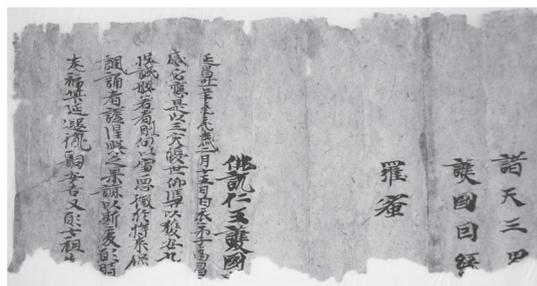


図5 「仁王經識語」（マンネルハイム・コレクション）

ます。マンネルハイム・コレクションには、以上に述べた識語を帯びる二断片の他に、字体と紙から高昌時代の同一写本と判断できる十六枚の『仁王經』写本が確認できま

す。
No. 63の識語を大谷将来文書やベルリン写本で補い校勘した本文とその現代語訳は以下になるでしょう。

【本文】

延昌卅一年辛亥歲十二月十五日、白衣弟子高昌王麴乾固、稽首歸命常住三寶、和南一切諸大菩薩。蓋聞覺道潛通、秉信可期、至理冥會、精感必應。是以三災擾世、仰憑獲安、九橫干時、廻向而蒙泰。今國處邊荒、勢迫間攝、疫病既流、有增無損。若不歸依三寶、投誠般若者、則以何雪惡徵於將來、保元吉於茲日哉。是以謹尋斯趣、敬寫仁王經一百五十部。冀受持者發无上之因、諷誦者證涅槃之果。謙以斯慶、願時和歲豐、國疆民逸、寇橫潛聲、灾疫輟竭、身及内外、病患實際、還年却老、福竿延遐、胤嗣安吉。又願七祖先靈、考妣往識、濟愛欲之河、果涅槃之岸、普及一切六道四生、齊

會道場、同證常樂。

〔現代語訳〕

延昌三十一年、辛亥の歲(五九二)、十二月十五日に、わたくし、在家の仏弟子である高昌王の麴乾固は、生滅不遷の仏・法・僧の三宝に稽首して礼拝し、あらゆる諸々の大菩薩に敬礼いたします。わたくしは次のように聞いております。大いなる悟りの道は人知れず通じるものであつて、信仰心を固く守ることによつて期待すべきであり、最高の道理は沈黙の中で得られるものであつて、心によつて必ず感応するのであると。そこで刀兵災、疾疫災、飢饉災の三災が世界を混乱させても、うち仰ぎ身を委ねたままで平安を得ることができ、九つの理不尽な死が時代の自然な流れに逆らつて訪れても、功德によつて泰平を得ることができるのです。今日、我が国は辺境の地に位置し、国勢は大国の間に圧迫され、疫病は蔓延し増えることはあつても滅ぶことはありません。仏・法・僧の三宝に帰依し、般若の智慧に身を任せない者が、どうして将来に起こる不祥の兆しを除きさり、大いなる幸福を現在に手に入

トルファン漢語文書と大蔵経(西脇)

れることができましょうか。そこでよくこの趣旨を考え、敬しんでここに『仏説仁王護国般若波羅蜜多経』一百五十部を筆写いたします。

ねがわくは、このお経をしつかりと保つ者がこの上ない悟りに達し、このお経を誦誦する者が涅槃を覚悟しますように。ねがわくは、この善きこと(筆写すること)によつて、天候かなつて豊かに稔り、国境の民は安らぎ、外敵の横行も聞かれず、災害はすつかり無くなつて、わたくしの身と皇后と女官および諸侯以下の臣下たちの難儀は除かれ、若返つて老いず、寿命ははるかに延びて、子孫は平和で幸福でありますように。さらにまた七代にわたる祖先の靈魂、亡き父母の御霊が愛欲の河を渡り、涅槃の彼岸にたどり着き、広く一切の六道(地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上)にいる四生(胎生・卵生・湿生・化生)の生き物が、すべて仏陀の悟りを開いた道場に集い、ともに涅槃に入ることを希求いたします。

『仁王経』を誦誦したり書写して鎮護国家と万民豊樂を

祈願することは、高昌国のみならず中国でも、また日本でも見られました。この識語の書かれた延昌三年（五九一）前後、高昌国の政治情勢は厳しいものでした。これまでに中国は南北朝時代の比較的短い分裂国家であり、突厥とは友好関係にありました。高昌国は両国とのバランスをとって、小国として平穩に自立を保つことができました。しかしこの頃、隋の統一（五八九年）によって、高昌国は中国傘下に足を踏み入れました。それを見透かしたように、翌年、突厥は高昌国に侵入し、四つの城市を攻撃破壊したのです。そのため二千人の高昌人が中国領土に難を逃しました。麴乾固（五六一一六〇一）の識語の中で、「今日、我が国は辺境の地に位置し、国勢は大国の間に圧迫され云々」というのはそのような状況を言うのです。『仁王経』の写経はこの危機を救おうとするものでした。

この識語が書かれて三十年ほど経った貞観二年（六二八）には、玄奘が高昌国を通じてインドに向いました。その時、国王は麴乾固の孫にあたる麴文泰（在位六二三—六四〇年）に代わっていました。玄奘は、仏教信仰の熱い王の要請に応じて、一ヶ月当地に留まって『仁王経』の講

義を行いました。王以下三百余人が玄奘の講義を聴きに集まったと記録されています。この経が連続と受け継がれていたことが分かります。

さて少し脱線しましたが、マンネルヘイムコレクションには小断片ながら貴重なトルファン写本が含まれておるとが分かりただけなことと思います。このコレクションには印沙仏断片はありますが、印刷断片はなく、写本ばかりです。

この章の最後に、「5 サンクトペテルブルグコレクション」について述べておきましょう。それは次の章のトルファン文書の版本についての導入になるでしょう。

ロシアは、列強に先駆けて、十九世紀末から中央アジア探検に乗り出しました。探検家としては、カラホトで西夏文書を発見したコズロフ (P. K. Kozlov 一八九三—一九三五) や、敦煌・トルファンで発掘を行った、仏教学者でもあるオルデンブルク (S. F. Oldenburg 一八六三—一九三四) が有名です。その探検・収集の歴史は、一昨年夏に京都国立博物館で催されたロシア探検隊収集の文物展「シルクロード文字を辿って」のカタログに載せられたポポヴァ

(L. F. Popova) 「十九世紀末から二十世紀初頭におけるロシアの中央アジア探検隊」に譲りますが、ここでは、クロトコフ (N. N. Krotkov 一八六九—一九一九) について話します。

クロトコフは、ウルムチ総領事や伊寧 (Kulja) 領事を務める傍ら、トルファンからウイグル文書・トカラ文書・ソグド文書・漢語文書等を収集しました。その漢語文献がどれほどの量にのぼるかは分からないのですが、いま『俄藏敦煌文獻』⑰ (上海古籍出版社、二〇〇二) には、一塊の木版仏典断片の画像写真が収められています。マンネルヘイムコレクションの『仁王経』断片が、ベルリンや大谷将来品と重なるように、クロトコフ収集品の木版仏典断片は、ベルリンコレクションと連続します。それと同時に、大蔵経テキスト研究にも大きな貢献を果たすことになったのです。次章で詳しく述べることにします。

三 トルファン文書の版本

トルファン文書の特徴に、敦煌文書に比べ小さいこと、そして古い写本が含まれていることを述べました。さら

トルファン漢語文書と大蔵経 (西脇)

に、もう一つは印刷本が多いことです。敦煌・莫高窟から敦煌文書の下限は十一世紀の前半ですが、トルファン文書は十二、十三、十四世紀にまで降り、印刷本が増えています。最近では敦煌・北窟の調査によって、金や元の時代の印刷本も見見されていますが、そんなに多くはありません。最初に見ていただいた史料「略符」には「宋本」「元本」「明本」が挙げられています。これらはすべて宋代以降に始まる大蔵経の版本テキストです。大蔵経の版本テキストは以下の三系統に整理されます。それぞれを簡潔に記します。

(一) 『開宝藏』、およびその覆刻の『高麗藏』と『金藏』
『開宝藏』(北宋時代の九七一—九八三年に始まる)。卷子本。一版二三行。一行一四字。界線ナシ。千字文帙号は『開元釈教録略出』に記されているものよりおおむね一字繰り上がる。『開宝藏』には天地の界線がないのに対し、覆刻(「被彫」、かぶせぼり、コピーに当たる)の『高麗藏』(一〇二—一〇八二年頃)と『金藏』(一一四九—一七三年頃)にはそれが備わっている。字形などはまったく変わらないので、同じ版木を用いて印刷したと考えられ

ている。

(2) 『契丹藏』（遼藏）『丹本』

聖宗の統和十年代（九九三—一〇〇二）。卷子本。一版二七—三〇行。一行一七字もしくは一七字前後。千字文帙号は『開元釈教録略出』に記されているものよりおおむね一字繰り下がる。天地の界線がある。一九七四年に、山西省応県の仏宮寺木塔第四層の釈迦像の胎内から十二（十）点の残卷発見。房山石經（千字文番号のあるもの）の底本。版式の特徴の一つとして、經卷の卷首と卷尾の經題の前後に野線を施すが、その形態は多様である。また鋭角的な文字にも特徴がある。

(3) 江南地方で雕刻されたいくつかの大蔵經

折本（折帖）形式。一版三〇行ないし三六行。一折六行。每版五折（半葉）ないし六折（半葉）。一行一七字。千字文帙号は『開元釈教録略出』に記されているものと一致する。

『崇寧藏』（福州、東禪寺等覺禪院版）…元豐三年（一〇八〇）—政和二年（一一二二）。每經の卷首に題記を備える。南宋から元にかけて補修がたびたび行われて

いる。

『毘盧藏』（福州、開元寺版）…東禪寺版が完成した政和二年（一一二二）に雕印が始まり、南宋の紹興二十一年（一一五一）に完成。その後、南宋の時代に補版が作られ、補修は元まで続いている。版式は『崇寧藏』と同じ。

『思溪藏』（湖州、思溪版）…湖州思溪（現在の浙江省湖州市）の王永從一族による私版大蔵經。北宋の末年、靖康元年（一一二六）に雕印が始まり、南宋の紹興二年（一一三二）に完成。『思溪藏』には『湖州思溪円覺禪院新雕大蔵經律論等目錄』と『安吉州法宝資福禪寺大蔵經目錄』の二つの目錄があり、前者に追雕補刻の部分を加えたのが後者である。

『磧砂藏』（蘇州、磧砂版）…平江府（蘇州）陳湖中の磧砂延聖院（元では延聖寺）で雕印された。南宋の嘉定九年（一二一六）に開雕されたが、宋元の王朝交替の際にしばらく中断を余儀なくされた。元の大徳元年（一二九七）から再開された。その後、追雕と補刊の事業は十五世紀前半の明の時代まで続いた。

『普寧藏』（杭州、普寧寺版）…元軍の兵火のために『思溪藏』が焼失し、大藏經の再刊が図られた。新興宗教教壇である白雲宗教壇の経済力と組織力が大いに寄与した。雕造には至元十四年（一二七七）から十四年を費やし、二十七年（一二九〇）に完成した。版式は『思溪藏』を踏襲している。

私は、ドイツ隊の将来した版本大藏經断片を整理しているのですが、その数は一二〇〇ほどです。その中の九割以上は契丹藏です。数枚の開宝藏があり、残りが金藏と单刻版ですが、この比率は「8 旅順博物館藏の大谷コレクシヨン」でも同じで、トルファンには契丹藏が一番多く入っています。

契丹藏と金藏は先の史料「略符」には登場しません。北宋の開宝藏は、十世紀末に尙然が一揃下賜されて日本に持ち帰りましたが、その後の契丹藏や金藏といった、華北地方で出版された大藏經は、日本に渡ることはありませんでした。それが「略符」に反映されているのです。「略符」の中の「宋本」は、年号が「A.D. 1293」であることから南宋の出版です。つまり、上の「(3) 江南地方で彫刻

トルファン漢語文書と大藏經（西脇）

されたいくつかの大藏經」が「宋本」です。日本と近い福州や杭州のものが入っているのです。それでも、契丹藏や金藏が世界のどこかに存在して見ることができれば、先に述べた「敦煌本」のように、『大正新修大藏經』が出版された際に利用されたでしょうが、その時にはその存在は確認できていませんでした。

契丹藏は、一九七四年に山西省応県仏宮寺の木塔の第四層に安置されていた釈迦像の胎内から、十二卷発見されたことは先に述べました。それまでは、契丹藏を底本に刻まれたと考えられていた房山石經の遼金刻經の部分から、契丹藏について、例えば印刷された時代や版式、あるいはテキストが推測されて論じられていたのです。僅か十二巻とは言え、契丹藏の実物の出現は、大藏經研究の進歩に大きな役割を果たすことになりました。ただ、すぐには公開されず、凶版と解説を付した『応県木塔遼代秘藏』（文物出版社）が出版されたのは一九九一年になってからで、発見から十五年以上も経っていました。

金藏も二十世紀に発見されました。一九三四年、山西省趙城県の広勝寺の弥勒殿から一藏がほぼ揃った形で発見さ

れのです。北宋・欽宗の靖康元年（一一二六）正月、首都の開封に金（一一一五—一二三四）が入寇し、翌年には、都下の顕聖寺聖寿禅院に置かれていた勅版大藏經の板木が、金兵の手によって運び去られました。その後、板木は行方不明でしたが、山西省潞州出身の崔法珍によって、三十年後に金藏の彫刻が企てられたのです。つまり金藏は、勅版ではなく、民間で開版された大藏經なのです。

一二三四年、モンゴル・宋の連合軍によって金は滅亡しますが、その時、弘法寺に置かれていた金藏の板木はモンゴルの時代にも伝存されました。一九八四年から出版された『中華大藏經』の底本は、広勝寺本（一二六二年）とチベットの薩迦寺北寺の大宝集寺本（一二五六年）の金藏を主として用いています。

新しく発見された契丹藏と金藏については説明すべき多くの問題が未だ残っています。本日は契丹藏の扉絵について話をしたいと思います。ついでに申しますと、上で述べましたように、『大正新修大藏經』とは高麗再雕本を底本にしているのですが、再雕本が印刻された際には、初雕本を契丹藏で対校し、その誤りを正しました（守其『高麗

国新雕大藏校正別録』）。従って、『中華大藏經』が新たに出版されても、『大正新修大藏經』の価値は色あせることはありません。

さて、契丹藏は卷子本です。題簽の見返し部分に扉絵の置かれる場合があります。一昨年夏に京都国立博物館でロシア探検隊収集の文物展（ロシア科学アカデミー東洋写本研究所の所蔵品）が開かれたことを上で申しましたが、その中に $\Theta 500$ 「釈迦説法図残欠」と表示される木版図が含まれていました。この展覧会はその前年にロシアでも催されました。その展覧会カタログの解説は、大きさとともに、「中国版本。このような版面は卷子本の扉絵として置かれ、仏典の内容を表現している。扉絵の有るものはごく稀である」と扉絵の一般的な知識を記した、非常に簡単なものでした。日本語版のカタログ解説はやはり扉絵の一般的なことに触れやや詳しいのですが、この扉絵そのものについては「巻頭の釈迦説法図の左半分が残ったものと見られる」に止まっています。問題は、両カタログとも右半分が存在に触れない点と敦煌収集品とする点でした。

実は、この図の右半分はすでにその存在がロシアの研究

者には知られていたのです。コズロフが黒水城から将来した西夏漢語文書は、『俄蔵黒水城文獻』全六巻として出版されていますが、その中でTK278の記号をもつ断片は、先のΦ360「釈迦説法図」の右半分に当たります。二断片は少しの隙間もなくピタリと接合するのです(図6)。

ただ問題は複雑です。TK278は三断片を含み、一つはこの「釈迦説法図」で、あとの二つはその裏側に重なっており、「中阿含経巻第十五題簽」(図7)と「摩訶僧祇律巻第五題簽」(図8)という題簽をそれぞれに持っていますので、表紙だと分かります。「叙録」(孟列夫(ヘメンシコフ)等が作成した断片目録。『俄蔵黒水城文獻』巻六所収)は、扉絵をはじめとする三片を「宋刻」としています。

ところで『俄蔵黒水城文獻』には、Φ360「釈迦説法図」も、敦煌収集品ではなく黒水城出土品として、TK278と一体のものとは気づかれずに収められています。その「叙録」は「宋刻」ではなくて、「西夏刻」と記されています。このようにロシア蔵の中央アジア収集品は、余りにも数が多いため、目録作成に従事する研究者の眼に止まらない限りは、もともと一断片でも異なる整理番号がつけら

トルファン漢語文書と大蔵経(西脇)



図6 「釈迦説法図」(ロシア蔵TK278+Φ360)

れ、どこの出土品かを確定することさえ容易でない場合が多いのです。

いま改めてこの扉絵「釈迦説法図」について考えてみますと、TK278を構成する二つの題簽は筆写であり、出土地等を明らかにする資料を提示しているのです。「中阿含経巻第

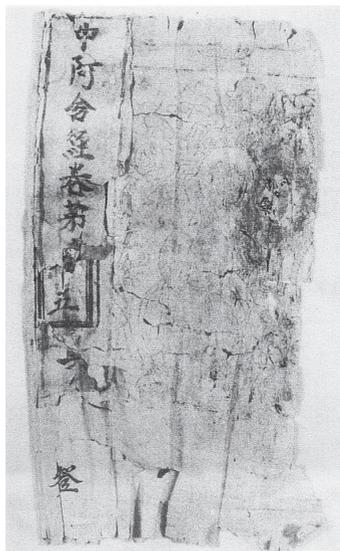


図7 「中阿含經卷第十五題簽」
（ロシア蔵 TK278）

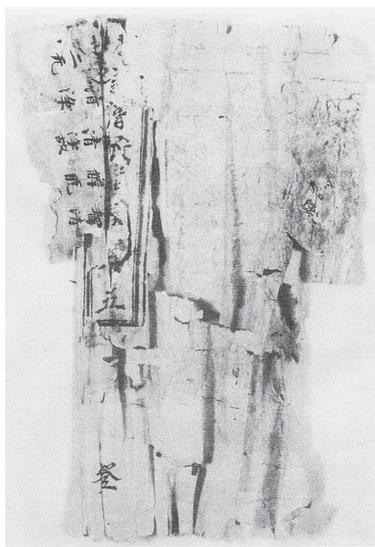


図8 「摩訶僧祇律卷第五題簽」
（ロシア蔵 TK278）

十五」の下には「興」の千字文帙号、「摩訶僧祇律卷第五」の下には同じく「登」が書かれているのが読み取れます。先に『契丹蔵』の千字文帙号は、『開元釈教録略出』に記されているものよりおおむね一字繰り下がる」と申しましたが、それに合致します。『中阿含經』六〇巻は、一〇巻ごとに、それぞれ「夙、興、温、清、似、蘭」の千字文帙号をもって整理されています。巻一五は「興」であり一致しますし、また『摩訶僧祇律』四〇巻は、一〇巻ごとに「登、仕、撰、職」の一字を帯び、巻五は「登」なので、これも一致します。

TK278は、図録では、扉絵とその裏側の題簽を備えた二つの表紙が確認されて整理されています。扉絵「釈迦説法の幅で紙が固められており、またそのすぐ左の中央あたりに穴の痕跡が見えます。卷子本を巻きあげてここに通した紐で縛ったと考えられます。ただ、扉絵の裏側には題簽を備えた表紙以外に別の写本も重なっており、複雑な様相を呈しています。とりわけ二つの題簽と扉絵の関係をどのように考えるべきかについては、問題が残ることになりま

す。ただし形態の面では、現在は一体として保存されているために、整理者もこの三つに共通の番号を付与したものであるのです。

実見して判断を下す必要がありますが、私は最近、中村一紀「宋版一切経表紙芯紙に見える反古紙について」(『書陵部紀要』五六、二〇〇四年度、一〜一五頁、図版一一)という論文に遭遇しました。これによって、「別の写本」の素性が分かることになりました。中村氏の扱った「宋版一切経」は宮内庁書陵部所蔵の福州版で、卷子本ではなく折本ですが、その表紙芯の一部に反古紙が使われていると述べています。【TK278】の二枚目の写真の左上の題簽の左半分には「智清／解脱／清淨故／清淨／二无」の文字が確認できますが、これが表紙芯紙に用いられた反古紙であろうと推測できるのです。反古紙として用いられたのは、この確認できる文字から、おそらく『大般若経』写本であったであろうことも分かってきました。

扉絵「釈迦説法図」の天地に配される金剛杵や雲紋の形が契丹版の特徴を示していること、あるいは西夏時代の黒水城から多くの契丹版が出土していることから、TK278+

トルファン漢語文書と大蔵経(西脇)



図9 『金藏』扉絵(大宝集寺本)



図10 『契丹藏』扉絵（ロシア蔵 TK274）

Θ 360の「釈迦說法図」は、敦煌出土ではなく黒水城出土（西夏）であり、宋刻でなく『契丹藏』の扉絵の一つであったと言えるでしょう。

扉絵は多く残っていませんし、また幾種類もあるわけではありません。『金藏』が出現して、その扉絵の一つに護法神の描かれたものがありました（図9）、これは『契丹藏』の扉絵を踏襲したものです（図10）。

最後に

私は先にも述べましたように、現在、ドイツのトルファン文書の版本仏典断片の整理を行っています。ロシア人のクロトコフがトルファンで手に入れた Jx17015-Jx17435 に多くの木版仏典断片が含まれていることに気づきました。その中には、契丹藏、金藏も含まれており、ベルリン断片整理には欠かせないと思います。昨年夏、暑いサンクトペテルブルグに見えました。予想通り多くの収獲を得ましたが、最大の収獲は、クロトコフの収集品とベルリンのコレクションには接続するものがたくさんあるという発見です。クロトコフは探検家でも学者でもありません。中央

アジアに派遣された役人で、政府の命令通りに文物を買い集めたのです。一方、ドイツは四回、探検隊を派遣し、発掘調査を実行しています。しかし、クロトコフ収集品との関係を考えれば、ドイツのコレクションも、全てが発掘品ではないと言えるでしょう。現地の人から購入したものも含まれているのです。

契丹蔵は、二十世紀末に十二巻がはじめて発見されたわけですが、それを利用することによって、トルファン文書に多く含まれる契丹版断片の版式等、新しいことが次々分かってきました。今日は、それにもっと時間をかけるべきであったと思いますが、扉絵で終わってしまいました。限られた時間の中で、限られたお話をするつもりで臨んだ訳ですが、最も重要なメッセージが伝わったかどうか、いささか危惧しております。

(二〇一一年六月二十二日に開かれた禅研究所の研究会で発表されたものに、加筆したものである。)